第2回

高林白牛口二の謡を聴く会

第一部

対談　村上湛　高林白牛口二

第二部

松風　高林白牛口二

八島　高林呻二

和布刈　高林昌司

花筐　高林白牛口二　亀井広忠

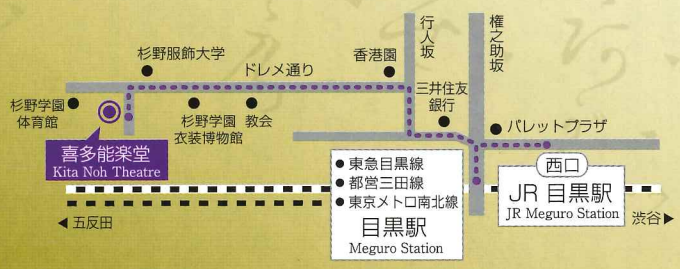
猩々　高林白牛口二

主催　高吟会

平成28年12月2日(金)　午後6時始　十四世喜多六平太記念能楽堂（喜多能楽堂）

- 入場料（全席自由席）￥3,000均一

※当日、松風の謡本を販売いたします。



〒141-0021 東京都品川区上大崎4-6-9　TEL：03-3491-8813

JR線・東急目黒線・都営三田線・東京メトロ南北線ともに目黒駅下車徒歩7分

- お問合せ

※チケットはお電話、メール、ホームページからもご購入いただけます。

【高吟会】

E-mail：koginkai@ares.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~koginkai/

TEL：075-462-1490　FAX：075-463-3494

〒603-8354 京都市北区等持院西町15

【喜多能楽堂ホームページ チケット購入ページ】

http://kita-noh.com/ticket/

背景：わんや刊行謡本より抜粋

第72回 喜多流涌泉能

動静以天地
視哉涌泉美　　鈿之翁

平成二十八年十二月二日（金）

第一部　午後六時始

対談　　明星大学人文学部教授　村上　湛
　　高林白牛口二

休憩（十五分）

第二部　午後七時始

一曲独吟　**松風**　高林白牛口二

仕舞　**八島**　高林　呻二

　　和布刈　高林　昌司

一調　**花筐**　亀井　広忠

祝言仕舞　**猩々**　高林白牛口二

以上

終了予定　午後八時半

主催　**高吟会**

（私説）謡の音楽論

私が私なりに定義付けした謡の音階を、論じてみようと思います。他流の事には触れられません。他流のものを解析しようと思えば、私が喜多流の節扱いを精通・会得しているものと同等の技能が必要です。これは不可能です。いや不可能と云うより、私の立場ではしてはならない事です。「天は二物を与えず」とか、「二兎を追う者は一兎をも得ず」と云う諺が示しているように、相違するものを共に会得して両立させる事は、出来ない事であり、またしてはいけない事だからです。私が会得して謡っている謡の、和吟の部分の音階を解析します。（強吟の音階は全く異なりますので、この稿では触れません。）

音階の低い方からの順序です。

一（0）　「呂」（リョ）
二（1）　（私はこの音階を使いません）
三（2）　「下」又は下の下
四（3）　下のウキ又は中のヲサヘ「素声」（シラコエ）
五（4）　「中」又は中の下
六（5）　中のウキ又は上のヲサヘ
七（6）　「上」
八（6半）　シホリのヲサヘ
九（7）　上のウキ
十（7半）　「入」（入リ節）及び「シホリ」
十一（8）　「甲」又は干（カン）（干の入り）

全部で十一の音階を謡い分けています。

右の内、八（6半）はシホリや入リが連続する時の、繋ぎの部分にのみに使います。十一（8）は一部の入り節に使います。短く一文字に限ります。洋数字で表している一段階は、洋楽で使われている一度に相当します。拍子に合わないサシやサシコエの「中下ゲ」は、六（5）の半音を使いますが最初の下げに限ります。（一部例外もあります。）一度この半下げ（中下げ）を使うと、それ以後はその音程が基準となります。つまり六の音程が五の音程となって、それ以後は半音上がった音程が五の正調となりますので、次に出て来る小ノリへの変わり目で、音程を半音下げる復調が必要となります。

先人達の使用していた謡本に遺されている、各人が書き加えた私的な節付けを分析してみると、如何にして謡を美しく楽しく謡っていたかを、推し量る事が出来ます。謡を聴かせる工夫が、全曲に亘って細かく書き加えられています。例えば既に途絶えた節の名に、「レンジ」というものがあります。漢字で表せば「連字」で、一句の当初の部分に書かれてあります。正しくは「連字抑え」と云います。謡出しの二文字にその記述があります。和吟で上音で平ノリの場合など、細かい条件があって、その条件が充たされた場合に使います。この節を自然に謡うためには、その前の句の語尾から準備的技巧が必要です。この準備的技巧は、下掛り特有の節に起因しています。この息継ぎを挟んでの連動によって、始めて成り立つ節遣いです。これは現代の喜多流からは消え去っていますが、私は今も常に謡っています。亡くなった粟谷菊生氏が晩年に私と、古老の謡の話をした時、思い出したようにして話されていましたが、彼も普段はこの節は謡われませんでした。

もう一つ、謡を美しく謡う技巧があります。これも和吟の場合です。音程が高い方に上がって行く時に、仮名の扱い方に技巧があります。日本語の仮名の発音は、全ての文字に子音と母音が合体して構成されています。つまり子音だけの発音はないと云って良いでしょう。この母音を活用する事によって、美しい節回しが発生するのです。音階が低くなる時よりも高くなる時の方が、自然と声量が豊かになります。その豊かになる音量を有効に活用して、即ち細やかに扱って節遣いを豊富に活用すれば、その分豊かな滑らかな節遣いとなり、濃やかな美しい謡を、謡うことが出来ます。。

その他にも、呂張りとか呂の利いた謡とか云う表現もあります。これらの節扱いは、気力や気迫が充実していないと謡えません。

私より一年と少し若かった狩野琇鵬さんが亡くなりました。彼が東京へ最後に出て来た時に「白牛口二さんに云って置きたい事がある」と前置きをして、私の父の謡が、彼の心に長く留まった話をされました。私が父の謡を最高の謡として持ち続けている事に、何の誤りもありませんでした。彼が最後に私にそれを、証明してくれました。彼からの私への遺言となりました。

今回は狩野琇鵬さんも聴いてくれています。大勢の先人故人を偲び、感謝の心を込めて謡います。どうぞみなさんもご一緒に、昔の謡の世界を、時空を超えて共有しましょう。前回は強吟を聴いて頂きましたので、今回は和吟の曲「松風」を選びました。

高林白牛口二

次回予告（通常公演）

平成二十九年　四月八日（土）　大江能楽堂

能　巴　　高林　昌司
能　小塩　　高林　呻二

許可無く写真撮影・録音・録画は堅くお断りいたします。
携帯電話など音の出る電子機器は予めお切り下さい。